

# *Wordsworth: Stepping Westward* の意味するもの

— 現 実 と 芸 術 —

添 田 透

詩が詩人の対象に対する私の活動の結果、脳裡に印された記憶心象、即ち詩人の内面的経験を読者に経験させる芸術であるとすれば、その為に伝達ということが問題になり、伝達の必要がある故に、そこに表現の問題が出て来る。詩人はその場合、恍惚境というか、神秘的世界に、換言すれば、彼独自の内観の世界に耽っているのだ、その顕現のために‘sensitive imagination’を通してのシンボルが使われるのである。

Scotland で古より幾人とも知れぬ人が、お互挨拶を交わしていたに違いない。その挨拶を発し、これを受けた旅人は無数といってよいであろう。今この詩により、我々はそのような挨拶について旅人達が何を感じたか、その挨拶を対象とする旅人の我がその心中に如何なる内面的形式を創ったかということを発端に、Wordsworth の考える「人間発言」の永遠につながる神秘的な意味を跡づけることができる。本研究は、*Stepping Westward* に見出される動機的直接経験である挨拶が、詩人に如何なる内面的経験を与えたかを、更に、その一時的な挨拶が永遠へと広げていく詩心の顕現の過程を鑑賞的に認識することを目的とする。

*Stepping Westward* は1803年 Wordsworth が Dorothy 達とスコットランド旅行に出かけた時の一連の詩の一つであり、彼にとってのいわゆる異常経験を基に創作されたものである。Moorman はこの旅行について次のように云っている。

The Scotland tour indeed was a holiday full of their own peculiar type of romantic pleasure. ‘Scotland’, said Dorothy, ‘is the country above all others that I have seen, in which a man of imagination

may curve out his own pleasure...<sup>1)</sup>

更に Dorothy は彼女の *Recollections of a Tour made in Scotland* の 1803年 9月11日の所で、彼等がこの挨拶を受けた時の状態を次のように述べている。

I cannot describe how affecting this simple expression was in that remote place, with the western sky in front, yet glowing with the departed sun. Wm. wrote the following poem long after, in remembrance of his feelings and mine.<sup>2)</sup>

挨拶は Wordsworth の心に一つの形象を喚び起した。そしてこの Dorothy の言葉は、彼の心に映じた形象を説明したものである。しかし後述するが、その形象をこの詩の内面的形式の表現へと導いた影響力を持つ動機となっているものは、別にあると考えられるのである。

時期は1803年 9月11日、日曜日のことであった。丁度陽が沈んだ直後の燃え輝く西空を背景にし、更に異様に澄んだ大気により広大無限の空間の広がりを感じさせられる状況にある詩人にとり、この Scotland の田舎の女性から耳にした挨拶は彼の脳裡に異様な神秘感を持たせたことは確実であろう。所が一方 Scotland では東西南北の方位を頻繁に用い、例えば食卓につく時、誰の北に、又は南に、坐るとか云うとある。とすれば、この Scotland での通常の日常会話の一つが Wordsworth に独特の響を持たせた何かが上記の環境以外にあった訳である。

symbolic figure として彼の詩中における wanderer は孤独であるが、この話し手は Scotland という異郷の地に居て、home も無ければ shelter も無いという表現を用いており、一方この挨拶は自国の湖のそばを歩いている女性の口から出たものであることを考えれば、女性の挨拶の 'What, you

1) M. Moorman : *W. Wordsworth : A Biography-The Early Years.1770—1803*, p.597

2) *Journals of Dorothy Wordsworth* ed. by E. de Selincourt, Vol. I, pp.367—8

are stepping westward?’ の中の **westward** という言葉を聞いて、もし此夕暮れに何の当もなく文字通りに、西の方へ漂然と歩むと仮定するならば、どれほど ‘wildish’ で、本当に天外の孤客という感じがすることであろうと云っているのも理解できる。

—‘Twould be a *wildish* destiny,  
If we, who thus together roam  
In a strange Land, and far away home,  
Were in this place the guests of Chance:<sup>1)</sup>

環境は確に言葉の持つ具体的抽象的内容に多様性を持たせることがある。唯この詩の場合、環境のみが、この挨拶をして彼の内観の世界とでも云おうか、内面的経験の世界を作り上げ、その表現へと彼の詩心を刺戟したのであろうか。Wordsworth の場合、詩の直接動機とそれによりもたらされる詩の世界との間には可成りの隔があることは衆知の事実である。時には別の世界といった方がよい場合もある。

**Katrine** 湖の岸辺で2人の身形の良い女性から挨拶を受けたのは前述の如く1803年9月11日であり、この女性の挨拶は **wandering** の精神的意味を Wordsworth の意識にもたらした。そして、Scotland の **visionary** な山々の間に **solitary** と **homeless** を感じ、人々の中に **wild sublimity** を発見させたのである。 **intimacy** というより、 **strangeness** がこの詩を含む **Highland Poems** の調子である。安全を見知らぬものの危険にさらすのはある意味で人間の精神的 **destiny** の一部であり<sup>2)</sup>、確かにこの詩は、その旅行の精神をよく要約していると云えよう。そして又 **heaven** と **home** の対照と結合は一般に彼の詩の中心にあるが、この詩に於てもこの両者の関係が種々変化に富んだ含蓄を持ってはいるが、底流にあると云えよう。その対照は人生詩でもあり、信仰と忍耐により外的環境の影響から免れうるという彼

1) *Stepping Westward*, 11.2—5

2) Cf. B. Groom : *The Unity of Wordsworth's Poetry*, p.64

の強い信念を示している *Resolution and Independence* によく表わされているが、そこに於ては家の無い蛭取りは *God good help* の中で安全であり、*earthly hope* を持っているが故に不安である地上的な家を持つ詩人を恥かしめる。Groom は又次のようにも云っている。

Wordsworth taught that human happiness and virtue depend upon the affections of home and family and on the hope of a Heaven of which nature presents an image and emblem.<sup>1)</sup>

力を込めてこれ等の真実を表現すること、及び詩的工夫によりその真実を生かすことが彼の詩の主なる目的であるとも云えよう。この詩に於て、この女性の挨拶は ‘The very sound of courtesy’<sup>2)</sup> であると云っているが、それは単に、人間を含めて一般に *living creatures* と呼ばれているものの中のみならず、自然の総ての物の中で、即ち宇宙の中で、*love* の *immanent spirit* が働いている証拠であると見ることが出来る。そして ‘...travelling through the world that lay/Before me in my endless way.’<sup>3)</sup> という考えを通して、その言葉に人間の愛の美しさを感じるのである。それ故 ‘home’ とか ‘shelter’<sup>4)</sup> というものを意識することなく偶然の客として旅をするというこの ‘wildish destiny’<sup>5)</sup> は実際は愛情ある天の導きであると結論づけるのである。Perkins はこの言葉を ‘...encouragement from a source less natural and familiar.’<sup>6)</sup> と云っているが、ここに於てわれわれは年老いた蛭取りに関する次の詩行を思い出す。

...like a man from some far region sent,

- 
- 1) B. Groom : *The Unity of Wordsworth's Poetry*, p.208
  - 2) *Stepping Westward*. 1.20
  - 3) *Ibid.*, 11.25—26
  - 4) *Ibid.*, 1.7
  - 5) *Ibid.*, 1.2
  - 6) D. Perkins : *Wordsworth & the Poetry of Sincerity*, p.201

To give me human strength by apt admonishment.<sup>1)</sup>

ここ迄来ると宗教的色彩が強くなって来るが、Scoggins は *Stepping Westward* が imagination の詩の範疇に入っていることを取り上げ、根本的に imagination の詩は宗教的であり、日々の出来事において imagination に現われる love の spirit に捧げられたものであると説明している。<sup>2)</sup> それ故表面上意味のない挨拶それ自身も spots of time となったのであるという考え方が可能となる。

以上1803年9月11日、彼が第一の直接経験として、換言すれば動機として受け入れた挨拶に関して、悲観的表現から楽観的表現へといわば自己説得的な発展へと進んだ Wordsworth の詩的情緒とでも云おうか、その挨拶が内観を通して出来上った内面的経験の芸術的表現を、概説的に表現してみた。次に以上述べた内面的経験にいたるその過程を、それとはまた別の線から探っていきたいと思う。

さて、west という語には「死」の image があることは伝統的な考えである。N.E.D. に於てもそれが明白である。以下、その「死」とこの *Stepping Westward* との関係を少し述べて見たい。

作詩の動機となった挨拶を女性から受けたのは 1803 年 9 月 11 日であり、この詩が実際に作られたのは、その 2 年後の 1805 年 6 月 3 日であることが Dorothy の *Recollections* の earliest MS. の Note として見出されるのである。

(The Poem was)“ written this day while W. and I and little Dorothy were walking in the green field, where we are used to walk, by the Rothay. June 3rd, 1805.”<sup>3)</sup>

1) *Resolution and Independence*, 11. 111—112.

2) Cf. J. Scoggins : *Imagination and Fancy*, p.118.

3) *The Poetical Works of William Wordsworth*, Vol. 111, p.444.

当時の日記から判断して、少くともこの挨拶を経験した当時は彼にとっては幸福な日々であったことは確実であるが、所が丁度この *Stepping Westward* を書いた 同じ日に 彼が書いた手紙のなかに 次のような 表現を見出すのである。

...many heavy thoughts of my poor departed Brother hung upon me, the joy which I should have had in showing him the Manuscript,<sup>1)</sup> and a thousand over vain fancies and dreams.<sup>2)</sup>

即ちこれはこの 詩を書いた 1805年 6月 3日の 4カ月前の1805年 2月 2日、Wordsworth に非常な精神的打撃を与えたと云われる弟 John の難船による死亡事件に言及したものである。彼の死は非常な悲しみを詩人に与え、例えば1802年春から初夏にかけて書き始められ1806年に完成した *Immortality Ode* の中でもその感情がにじみ出ている。

The Clouds that gather round the setting sun  
Do take a sober colouring from an eye  
That hath kept watch o'er man's mortality;  
Another race hath been, and other palms are won.<sup>3)</sup>

そして、彼は Lincoln の僧正であった甥に、子供の頃彼はやがて墓に静かに横たわるであろうとか、自分の肉体が腐って地になるであろうとかを、どうしても信じ得なかったと云ったことがあった。又 Dorothy は日記の中で次のようにも述べている。

...we both lay still, and unseen by one another; he thought that it would be as sweet thus to lie so in the grave, to hear the *peaceful*

1) *The Prelude*.

2) *The Early Letters*, 218, p.497. W. W. to Sir G. Beaumont, June 3rd, 1805. Cf. M. Moorman: *W. Wordsworth: A Biography—The Later Years*. 1803—1850, pp.55—6

3) *Immortality Ode*, 11.200—203.

sounds of the earth, and just to know that our dear friends were near.<sup>1)</sup>

この様な空想が魂の永生を考えさせたのであろう。死が休止であり、生が活動であるとするならば自意識のない精神活動は詩人にとり生ではない。われわれが永生という思想を抱き得るのは、自意識が継続し、存在することを前提とした上でのみ可能である。当時の Wordsworth は精神あつての肉体という観念を持つ故に、死を超越するのみならず現象界を超越することが出来たのだとも云えよう。しかし、夢想は現実には矢張り弱いものである。現実の死は彼に大変な精神的ショックを与えたのであった。ロマンティズムの非難される一点は主情的であり、リアリズムに欠けている所であるが、この弱点をその事実は端的に示している。そして death と future life についての深刻な reflection を起させた。死によって生じる思考原理の破壊は神よりも人間の中により大きな愛を含むということをこの詩は云わんとしているようにも思えるし、彼自身手紙の中で次の様に云っている。

The thought is monstrous; and yet how to get rid of it, except upon the supposition of *another* and a *better world*...<sup>2)</sup>

確かに John の死は Wordsworth をして人間に対して同情を持たせるようにしたし、人間の詩人たらしめたことは事実だ。このことは John の死と関係のある *Peele Castle* の中にその証拠を見出せることから理解出来る。

A deep distress hath humanised my soul?<sup>3)</sup>

又父の死は彼の13才の時襲ったものであったが、彼にとり、自分の少年時代を *divine being* のように思わせた所の彼自身の永遠性についての大胆な確信に対しての鋭い非難のように襲って来たのも事実であった。

- 
- 1) [April] 29th, 1802, (*Journals of Dorothy Wordsworth* ed. by E de Selincourt, Vol. I, pp.139—140)
  - 2) The Early Letters 204, p.460. W. W. to Sir George Beaumont, March 12th, 1805
  - 3) *Peele Castle*, 1.36

The death of his father, in the second spot of time, seems to have confirmed the boy's solitude, which is not happily accepted, but felt as a chastisement.<sup>1)</sup>

尚われわれは John の死については先程少し触れた *Elegiac Stanzas Suggested by a Picture of Peel Castle, in a Storm, Painted by Sir George Beaumont* なる1805年に作られた詩を持つ。

確かに彼の人生観は根源的には楽天主義的である。例えば *The Prelude* の中で次の如く云っているのもその一証拠であろう。

Our destiny, our nature, and our home  
Is with infinitude, and only there;  
With hope it is, hope that can never die,  
Effort, and expectation, and desire,  
And something evermore about to be.<sup>2)</sup>

自然の根源を歎びとみた Wordsworth も実人生に於ては、そうではなかったのである。人生の不幸は向うからやって来るものであり、人生は事実不幸に満ちている。しかし彼は人生の不幸を排除する態度よりも、不幸は不幸として受けとめ、人生を歎く心から悲惨を遠視して悲惨を歎びに趣を添えるものとし、それを克服することにより創造の世界に幸福への道を求めた。詩人 Wordsworth である以上、不幸を通して詩作の生活に精神を集中することが賢明な態度であるとする見方もできるであろう。John が難船し雄々しい最後を遂げた時、Wordsworth は 'Alas! what is human life!' と歎き 'Heaven knows I want consolation myself.'<sup>3)</sup> と非常に悲しんだが、自ら慰めて次の様に云っている。

For myself I feel there is something cut out of my life which

1) G.H. Hartman : *Wordsworth's Poetry 1787—1814*, p.215

2) *The Prelude*, VI, 11.538—542.

3) The Early Letters 196, p.447. W. W. to Sir George Beaumont, Feb. 11, 1805..



cannot be restored... I never wrote a line without thought of giving him pleasure... But let me stop. I will not be cast down; even if only for his sake I will not be dejected. I have much yet to do, and pray God to give me strength and power; his part of the agreement between us is brought to an end, mine remains; and I hope when I shall be able to think of him with a calmer mind, that the remembrance of him dead will even animate me more than the joy which I had in him living.<sup>1)</sup>

いずれにせよ、John の死は彼の魂を人間的にした。不幸を知らぬ人間には深みが無い。ここでは哲学的自我主義が破れ一時的にもせよ、人間的自我の世界に入っているのである。人間感情の世界では彼も超人的ではあり得なかった。そして愛情に一層の共感を感じずようになり、哲学的自我の世界に入っても、あらゆるものに愛の魂を見出したのである。それ故そこからにじみ出る人間性が一層美しい atmosphere を詩に与えているのである。*Stepping Westward* のただよわせる atmosphere はここに由来することが考えられるのである。

現実的に弟の死にぶつかり、死の世界を高踏的自我の世界で heaven に結びつけているのであるが、この heavenly という言葉は勿論 David Perkins<sup>2)</sup> も云うように christian meaning を持たず、又それは skyey と同義と見做すことが出来よう。その思考の底流には浪漫派詩人 Wordsworth として、矢張りロマンティシズムの原理を set することによる、個人的感情の普遍化がある。即ち人間が永遠に歩み続ける目的地は vague regions of brightness であるが、そこには魂を感覚の世界から高めた所の種々なる経験により作り出された人間性の高揚が見受けられ、かつ人間はその holiness を分け持つ権利があることを示す内容が見出されるが、それは一種の 'yearning' と受け取ることができる。そしてこの 'yearning' は romantic poetry の typical

1) *Select Poems of William Wordsworth*, p.318.

2) Cf. D. Perkins : *Wordsworth & the Poetry of Sincerity*, pp.200—202

なものである。これが彼の詩質の特色の一つである所の人間は最後の土壇場迄希望を抱くように、少しでも光明を増すように努力をするよう運命づけられているのだという彼の 楽天主義とあいまって一つの心象を作り上げているといえよう。

Not without hope we suffer and we mourn.<sup>1)</sup>

唯この希望があったとしたその心的なものを外に現わす技巧は **imagination** による。即ち挨拶の中の **westward** という言葉自体の含む「死」が John の「死」という事件により刺戟を受け、そこから引き起される内面的経験から、**imagination** は 'a sound/Of something without place or bound' という、空間の超越という印を作り出したのである。挨拶という **sublime** な経験それ自体は **symbol** であるが、この詩自体の **symbol** ではなく、手段であって、**symbol** は想像的過程のものであり、その過程において、挨拶は人間の心と家は永遠と共にあり、又そこにのみ存在する<sup>2)</sup> という楽観的信念に発達し、**destiny, nature, home** は総て **hope** と共にあるという超感覚的意味を得るのである。彼の場合 **imagination** という言葉は他に適当な言葉が無い故、止むを得ず用いられていて、結局は精神の内奥の深淵から生ずるものであり、想像力が働く場合は日常感覚が無くなり、不可視の世界が現われる。そして彼の精神は永遠なる存在と合体するのであるが、この **imagination** が対象の神秘性を洞察している証拠として、そして、この力の働きが強くなるにつれ、普通の言語で表現不可能なものを可能ならしめるものとして **symbol** を持つのである。Wordsworth の思索は思索として残るが、**imagination** がその経験を操作するという重要性をこの詩は示していると云えよう。

1803年9月11日に彼の心の琴線に触れた挨拶は、Wordsworth の心に一つの **image** を、その環境を背景として喚び起し、更にその **image** を中心として、その後2年たった1805年2月2日に起った John の死という事件

1) *Peele Castle*, 1.60

2) Cf. *The Prelude*, VI, 11.538—539

という詩的刺戟を受け全く新しい内的世界を4カ月後の1805年6月3日に *Stepping Westward* という詩の世界の中で展開したのであった。そして *Stepping Westward* における挨拶の重要性は感覚を限界に迄、即ち *imagination* にゆだねる迄広げたその力である。彼の表現の世界として H. Lindenberger は次の如くいっている。

Facing the dual task of retelling past events and at the same time convincing the reader of their significance, he developed a way of doing both at once: reality became symbol, concrete detail became abstraction, description became assertion, tenor and vehicle became indistinguishable.<sup>1)</sup>

Wordsworth に登ることは絶えず霧のかかった山に登ることであり、霧の為に人間の心の光景が見えかくれする。この見えかくれの問題性が彼独特のものであると云ったのは C. Williams<sup>2)</sup>であるが、彼の詩心に近づくことは登ることに似て矢張りなかなか容易なことではない。しかし、現実と経験の「見えかくれする」その詩を通して、シンボルや抽象の意味を考える以外に方法のないことも事実といってよいだろう。

---

1) H. Lindenberger : *On Wordsworth's Prelude*, p.155.

2) Cf. C. Williams : *English Romantic Poetry*